
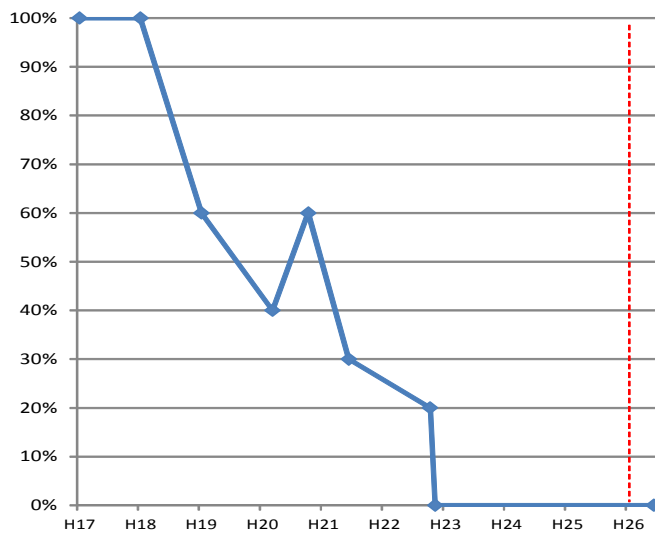


樹種名	シオジ	
科目	モクセイ科	
学名	<i>Fraxinus platypoda</i> Oliv	
分布	日本では栃木県西部から南の本州、四国、九州地方で、温帯の中古生層（2億5千年前の地層）地域の沢沿いに、不連続に分布する。日本海側にはほとんど見られない。	
樹木特性	日本の特産種であり、樹幹は通直で、枝下が長く、断面も正円に近く、溪流沿いに生育し生育する。	
用途	加工が比較的容易で、家具材として最も良い材のひとつであり、洋家具、書棚、陳列棚、仏壇には適材である。化粧合板、床柱、建具、器具、楽器、運動具など用途が広い。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	10本/0.003ha (3,000本/ha)	
特徴	<p>【樹形】 落葉広葉樹であり、大きいものでは直径1m高さ30m程度まで成長する。 樹皮はやや褐色を帯びた灰白色で、縦の裂け目が割合規則正しい。小枝は太い。 葉は5～9枚(3～4対)の小葉(側脈7～9対)からなる奇数羽状複葉である。葉柄を入れると25～35cm前後・左右と十字形に対生する。葉柄の基部は著しく膨らみ、中に小さな冬芽がある。 雌雄異株で、4～5月、葉を出す前に前年枝の葉痕のわきから長さ10～15cmの円錐花序を出し、多数の花弁のない小花をつける。 10月ごろ、長さ3～5cm、幅1～1.5cmの狭長楕円形の翼を持つ果実が熟す。 辺材は淡い黄白色で、心材は淡灰褐色～淡黄褐色を呈している。辺材の境目は明瞭。年輪は明瞭である。木目は直通であるが木肌はやや粗い。材はヤチダモに似ているが、やや軽軟。アッシュやタモと同じ属性の木材であるが、やや木質の色が濃くなる。櫟や桜のような重さがあり硬く韌性が高いが加工性は良いことから、家具(窓枠や手すりなど)や装飾材と使用される。</p>	
試験地での様子	ポット苗により植栽したが、生育環境が異なったことにより、5年が経過した時点(平成22.6月)に全て枯死した。	
被害	野兎・鹿等による食害や、コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害は見られない。	

シオジ 現存率



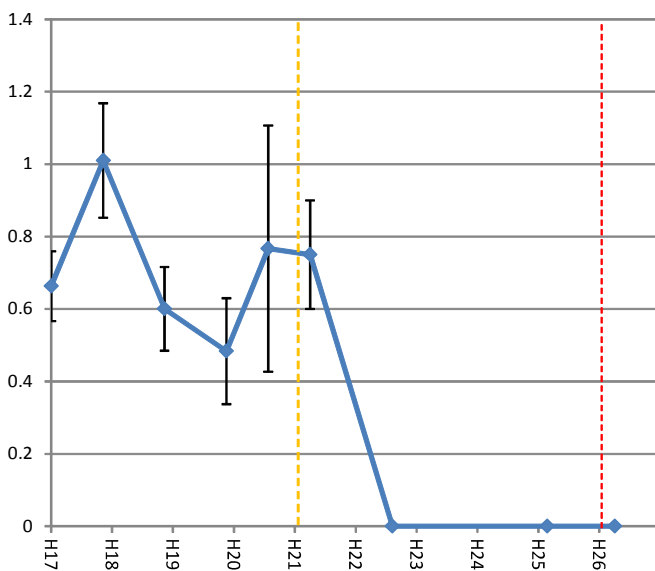
【現存率】

植栽して5年（平成22年）を経過した時点で、全ての植栽木は枯死し、現在は現存していない。
平成20年度に現存率が上昇しているのは、平成19年度に3本補植したためである。
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

植栽後は順調に成長していたが、5年後に全て枯死したため継続データは捉えられなかった。
平成20年度に根元・胸高直径が上昇しているのは、平成19年度に3本補植したことにより一時的に上昇したが、枯死したため調査対象木が著しく低下した。
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。
※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

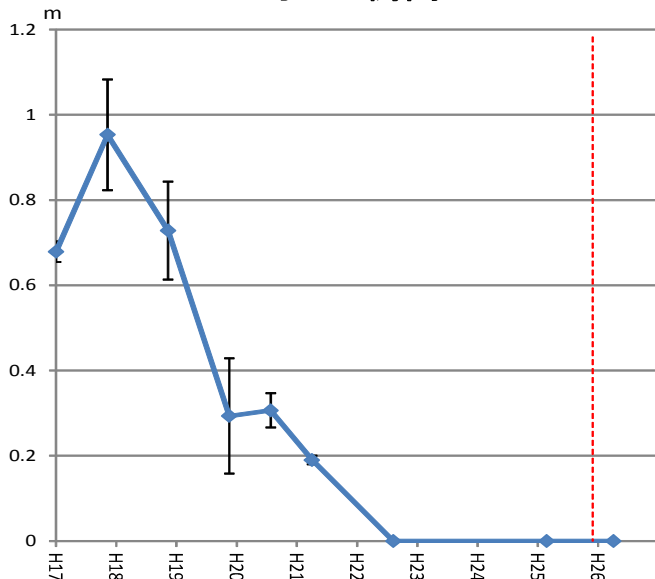
シオジ 根元・胸高直径



【樹高】

植栽後は順調に成長した樹木から枯死していったために樹高が年々減少し続け、5年後に全て枯死したため継続データは捉えられなかった。
平成20年度に樹高が上昇しているのは、平成19年度に3本補植したことにより一時的に上昇したが、枯死したため調査対象木が著しく低下した。
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

シオジ 樹高





《プチ情報》

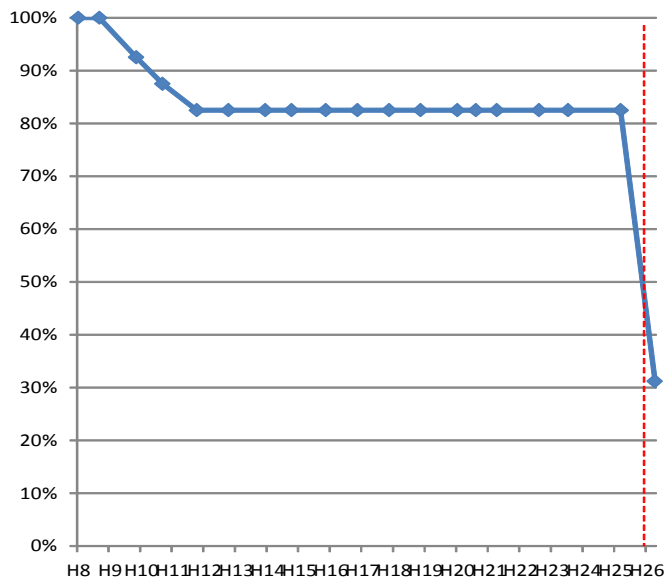
柾目（まさめ）がとおり割りやすいので柾寿や柾樹の名前が付けられ、その音読みがシオジに転じた。和名は「塩地」という。ケヤキ、クリ、クワの代用材として利用される。

シオジとヤチダモは非常に似ており、見分けは難しいが、シオジは葉柄の基が肥大し、茎を取り巻いているが、ヤチダモは茎の周りの1/4以上に達しないので区分ができる。

またヤチダモは本州中部～北海道など寒冷地に多く分布するのも違いである。

樹種名	シラカシ	
科 目	ブナ科	
学 名	<i>Quercus myrsinaefolia</i>	
分 布	福島県以西の関東地方の山地に主に自生し、この森林帯の北限付近で多く見られ、国外では朝鮮半島南部照葉樹林に多い。 照葉樹林の構成種ではあるが、本州南岸以南では数が少ない。	
樹木特性	半陰樹であり、低地の台地及び丘陵地で生育し、乾燥には弱い。 関東ではアカマツ林やコナラ二次林の中にシラカシの稚樹が出現した。 また、母樹の直下では厳しい光環境のため、稚樹の定着は困難である。	
用 途	公園樹、建築・器具・楽器材として利用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	138 本 / 0.07ha (2,000 本 / ha)	
特 徴	<p>【樹 形】</p> <p>シラカシ（白樫・白檀）は、ブナ科コナラ属の常緑高木、いわゆるカシ類の一種である。名前は、材が白色であることから。樹皮の黒さから「くろかし」の名もある。</p> <p>樹高は 20m 程度まで成長し、樹皮は黒色である。葉の形は 5~12cm の長楕円形で互生し厚い。上半部の縁には鋸歯があり、上面は濃い緑色でつやがあり、下面は薄い緑。ウラジロガシのように白いわけではない。</p> <p>花は雄花は 6~9cm の尾状花序で黄褐色、雌花は数花を上向きにつける。果実は堅果で、下部は殻斗（がくと）に包まれる。10 月頃結実する。</p>	
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽後 2 年を経過した頃からコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。	
被 害	植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害が発生した。（延べ駆除本数：26 本）	

シラカシ 現存率



【現存率】

植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害による枯死が発生した。

平成 12 年度以降の枯死は見られない。

枯死した空きき地に、平成 17 年度補植を実施した。

林内の照度調整を図るため平成 18 年、平成 20 年、平成 21 年度に本数調整伐を実施した。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 31.2%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

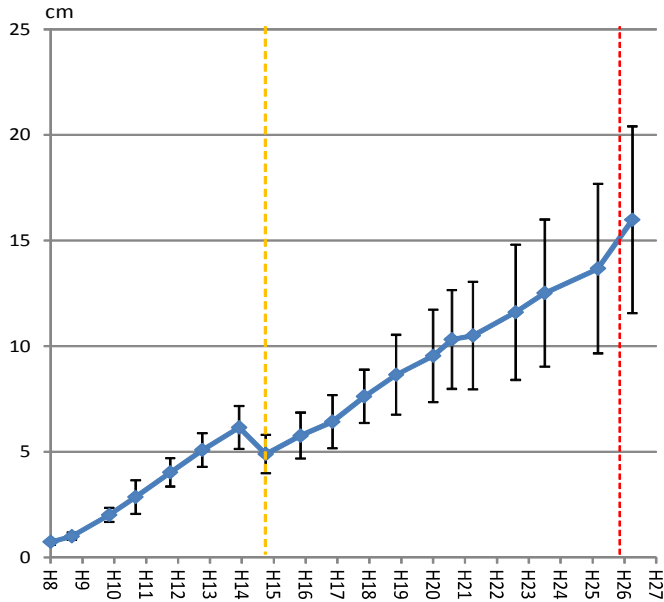
順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 15.98 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

シラカシ 根元・胸高直径



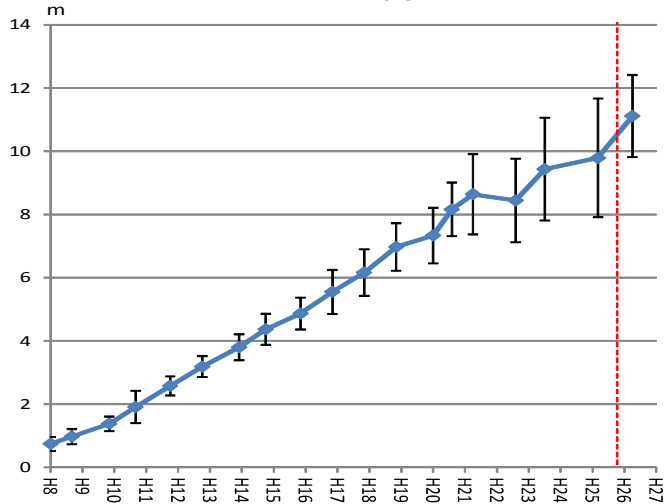
【樹 高】

順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 11.11m であった。

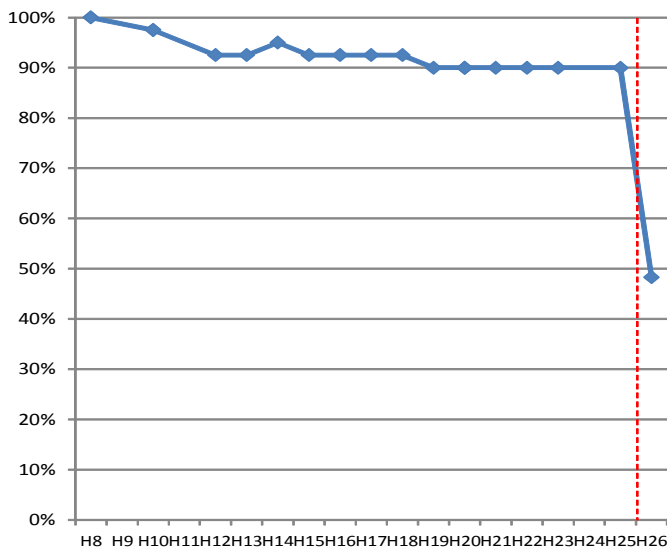
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

シラカシ 樹高



樹種名	シリブカガシ	
科 目	ブナ科	
学 名	<i>Lithocarpus glabra</i>	
分 布	常緑性の高木で、暖帯性であり、近畿地方以西の本州、四国、九州、沖縄の比較的海岸に近い標高 500m 以下の地域に分布し、京都府の保津峡が分布北限である。分布北限の近畿地方の個体数は少ない。 日本以外に中国南東部・台湾にも分布する。	
樹木特性	半陰樹で、やや乾燥した丘陵地の照葉樹林に生育し、占有することもある。	
用 途	公園樹、建築・器具材として利用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	60 本 / 0.02ha (3,000 本 / ha)	
特 徴	<p>【樹形】 常緑高木で樹高は 10~15m。幹は直立、分枝する。樹皮は灰褐色でなめらか。若枝には短毛が密生する。 葉柄は 1~1.5cm、葉は長さ 8~15cm で肉厚で革質、葉形は長楕円形で先が鋭く尖る。葉縁は全縁、ときに葉上部に浅い鋸歯が 1~2 個ある。葉の表面は緑から濃緑色で光沢があり、葉裏は淡緑色で鱗状毛が密生し金色または銀色の光沢がある。側脈は 6~8 対である。その葉質や形はアカガシによく似ている。 堅果は翌年の秋までに熟し基部の着点がかくぼむ、食べられる。秋には花(9月から10月)と実が同時に見られる。材は堅く器具材となり、昔は良質の薪炭材として利用された。</p>	
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽から 18 年が経過した現在の平均樹高は 12m 程度まで成長している。現存率は 48 %となっている。	  
被 害	植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。 (延べ駆除本数 コウモリガ：9 本、カミキリムシ類：1 本)	

シリーブカガシ 現存率



【現存率】

植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害が発生した。

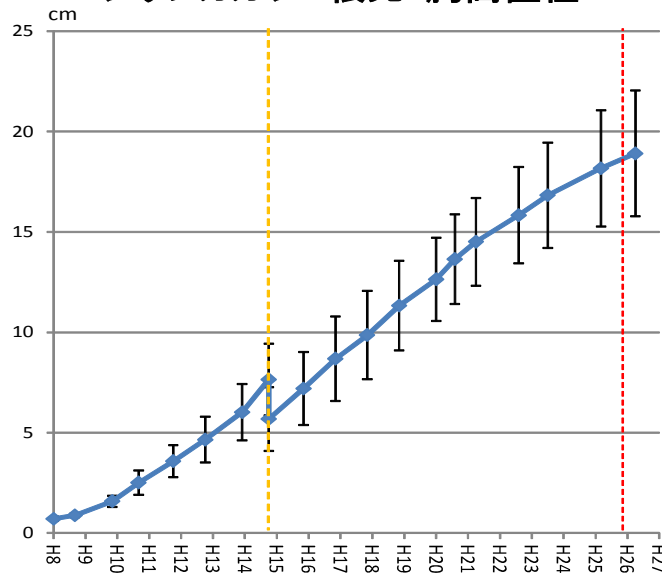
平成 19 年度以降の枯死は見られない。

林内の照度調整のために、平成 21 年度と平成 23 年度の 2 回に分けて本数調整伐を実施した。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 48.3%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

シリーブカガシ 根元・胸高直径



【根元・胸高直径】

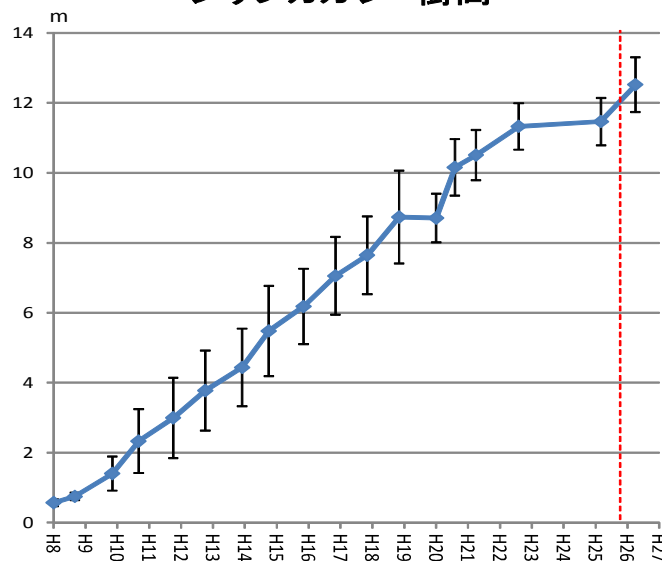
順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 18.91 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

シリーブカガシ 樹高



【樹高】

順調に成長している。

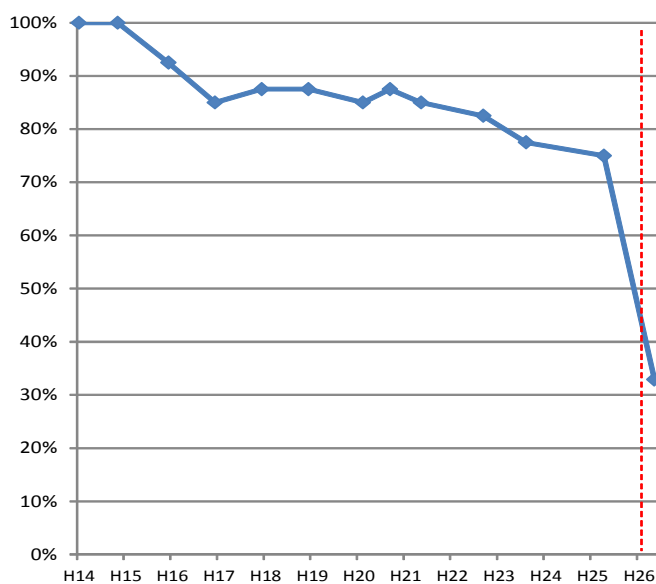
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 12.52m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



樹種名	シロダモ	
科目	クスノキ科	
学名	<i>Neolitsea sericea</i>	
分布	本州の山形県と宮城県以西、四国、九州及び南西諸島に、国外では朝鮮半島、中国及び台湾に分布する。山地や低地の森林内に生育する。	
樹木特性	陰樹であり、低地や山地の照葉樹林に生育している。暗い環境でも成長し、比較的長寿な樹種であるため稚樹が暗い環境にある程度耐え閉ざされた林冠の下でも前生稚樹を形成できる。 生育環境が良好な場合では、寿命は最大樹齢が100年以上と推定され、埋土種子は無い。	
用途	防風樹、器具材として利用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	255本 / 0.11ha (2300本 / ha)	
特徴	<p>【樹形】</p> <p>シロダモは、クスノキ科シロダモ属の常緑高木。別名はシロタブ、タマガヤで、樹高は10~15mに達する。幹は直立し、樹皮は紫褐色から暗褐色。若枝には黄褐色の絹毛がある。</p> <p>葉は互生、葉柄があり、枝先に密にする。葉身は長楕円状披針形で、長さ8~18cm、先端は尖り、3行脈が目立つ。若葉には黄褐色の絹毛があるが、後に表面は無毛になり、裏面は粉白色を帯び、多少絹毛が残る。雌雄異株。花期は秋。花は散形花序で、葉腋に黄褐色の小花を多数つけ、翌年の秋果実が赤色に熟す。果実は楕円状球形で、長さ12~15mm。</p>	
試験地での様子	<p>ポット苗を植栽し、植栽後からコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害による枯死が発生した。さらにウサギによる食害も発生した。また、平成14年に寒風害による被害を受け全個体が枯死したことにより、場所を移設し新たに植栽(改植)した。平成14年3月に改植した調査木は寒風害による被害は発生していない。</p> <p>植栽(改植)から12年が経過した現在の平均樹高は4m程度まで成長している。現存率は33%となっている。</p>	
被害	ウサギによる被害が発生した。コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。(延べ駆除本数 カミキリムシ類:1本)	

シロダモ 現存率



【現存率】

植栽後よりコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害や、ウサギによる食害による枯死が発生した。

平成 14 年に寒風害による被害を受け全個体が枯死した。このことにより、場所を移設し新たに植栽した。移設した場所では、雑木の進入が多く被圧されていたので平成 20 年度に除伐を実施した。

現存率のデータは平成 14 年 3 月以降に改植した調査木であり、被害は発生していない。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 32.9%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

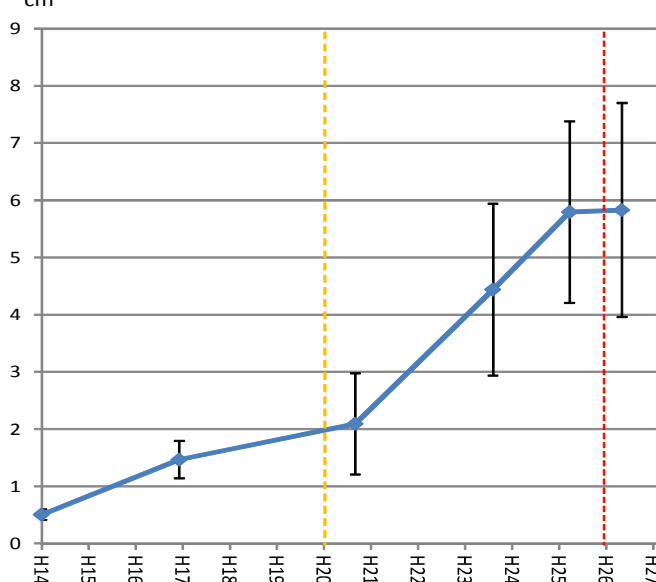
順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 5.83 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

シロダモ 根元・胸高直径



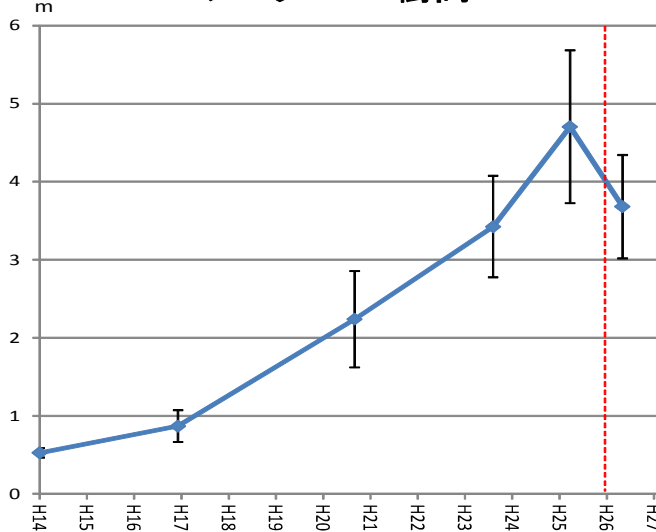
【樹 高】

順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 4.94m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

シロダモ 樹高



《プチ情報》

木全体に精油を含み芳香があり、種子から採油し、蠟燭の材料とする。